第 1 章
はじめに

- 1 - 1 本研究の背景と目的
- 2 本論文の構成

1-1 本研究の背景と目的

本研究は、「歩行感覚」という新しい視点から歩行空間の特性を明らかにし、歩行空間の新たな魅力とこれからの歩行空間づくりのためのものである。

田村明はその著書の「環境計画論」のなかで、

歩行者が都市の中でしっかりとした地位を占め、歩行空間が都市の中にセットされたときに、都市はさまざまな変化を生ずることになる。それは現代都市が長年の間に生じたさまざまな矛盾や問題点を、新たな角度から切り開こうというキーワードになるのである。

と述べている¹⁾。このように歩行空間は都市において重要な空間であり、その空間からすべてがはじまるといっても過言ではない。

歩行空間とは、人間が自動車問題を抱えたそのときに生まれた概念である。都市において主役であった人間は、利便性、機能性に優れた自動車に主役の座を奪われてしまった。この結果、都市から人間の居場所がなくなり、人間のスケールとはかけ離れた人間味のない都市が形成されてきた。

人間は環境を視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚の五感全体で認識して生きている。イーファー・トゥアンは次のように述べている²⁾。

感覚は、心の庇護と指示のもとで、われわれに世界を与えてくれる

このことから、歩行空間を人間の感覚をもとに見直し、整備することで人間味のある都市を創ることができると考えられる。これまでは、視覚、聴覚、そして近年では嗅覚の視点から都市における歩行空間は研究されてきたが、触覚、味覚はまだその成果をあげてはいない。特に、触角は人間存在にとって最も直接的かつ本質的な感覚であり、これを無視することはできない。歩行空間における触角、すなわち「歩行感覚」から歩行空間を評価することは意義の深いことであると考える。

本研究では、この「歩行感覚」から歩行空間を評価するための手法を開発し、実際に評価することを目的とする。

1-2 本論文の構成

本研究を明らかにするためのプロセスとして、下記のように論文構成をおこなった。本論文は結論を含めて5章から構成されており、各章における研究の目的および方法は以下の通りである。

第2章で歩行空間と歩行および歩行空間における環境認識手法を研究することの重要性を説き、さらに本研究の背景と目的を明確にし、研究の視点を明らかにする。

第3章では、分析をおこなう上での視点を明らかにし、分析の方法を示す。本分析をおこなう上で、まずその視点として、「フレーズ」「ハーモニー」「メロディー」の定義を行う。また、「歩行感覚」から分析をおこなうにあたり、「歩行空間を構成する要素」を整理する。ついで、調査対象を選定し、調査対象からの抽出方法について述べる。

第4章では、第3章で設定した分析の視点と方法から、「ウォーキングマップ京都」「ウォーキングマップ大阪」「ウォーキングマップ神戸」に掲載された30事例の分析をおこなう。まず「フレーズ」の視点では、コースを「フレーズ」に分節化する。「ハーモニー」の視点では、「フレーズ」の特徴を明らかにし、典型的な「フレーズ」のタイプを明らかにする。「メロディー」の視点では、「ハーモニー」の変遷として「フレーズ」を再構成し、一つのコースとしてその特徴を明らかにする。

第5章では、第4章で分析した結果について、「ウォーキングマップ」に記述されたコースを紹介する文章から、各コースについて考察をおこなう。

第6章では、本研究の概要と得られた結果をまとめ、歩行空間計画との関係について述べる。さらに、今後の歩行空間のデザインについて提案をおこなう。

註および引用文献

- 1) 田村明：環境計画論，鹿島出版会，pp100（1993）
- 2) イーファー・トゥアン著，阿部一訳：感覚の世界 美・自然・文化，せりか書房，pp51（1994）

-
- 1)
 - 2)